

第6章



環境保全に向けての参加の促進

第6章 環境保全に向けての参加の促進

第1節 環境教育・環境学習の推進

1 環境教育【教育指導課、環境政策課】

(1) 環境教育のねらい

学校においては、持続可能な社会の実現を目指し、児童生徒の環境問題への関心を高めるとともに、人間と環境の関わり方や環境に対する人間の責任・役割について理解させ、環境の保全やよりよい環境の創造に向け、生涯にわたって主体的に行動できる能力や態度を育成することが大切です。

そのためには、以下のことが求められます。

- ①教育課程への適切な位置付けと、年間指導計画に基づいた指導
- ②全教職員の共通理解と推進体制の確立
- ③地域の人材や自然、素材（ひと・もの・こと）を生かした学習活動の工夫

(2) 「学校版エコライフチャレンジしまね」の推進

- ・環境に負荷の少ない学校運営を目指して、平成18年度から県内全ての公立・私立・附属学校を対象にして開始しました。
- ・各学校での消費エネルギーを入力すると、自動的にグラフ化して表示したり、二酸化炭素の削減量を表示したりできます。また、各学校の取組計画や、活動レポートを掲載し、県民に広く公開することで、情報の発信や共有化も可能です。
- ・平成30年3月31日現在、282校の登録（県内の全ての小・中・高等学校・特別支援学校の75%）がありました。
- ・「学校版エコライフチャレンジしまね」のURL
URL <http://www.ecoschool.jp/scl/>

(3) 学校における3R・適正処理学習支援事業の実施

次世代の子どもたちが、リサイクルに取り組む企業等に出向き、循環型社会についての理解を深めてもらうことを目的とし、中学校・高等学校・特別支援学校を対象に1校30万円を上限として補助しました。平成29年度は19校に交付しました。

(4) 環境教育の実践例

① 小・中学校の取組

○大田市立池田小学校（池田小学校緑の少年団）

大田市立池田小学校は、島根県中央部に位置する国立公園三瓶山に臨む雄大な自然に囲まれており、2006年に開始した「ヒロハノカワラサイコ」の保護活動を中心に、三瓶山の自然環境保護に積極的に取り組んでいる。また、ふるさとの自然環境を理解し大切にすることで、ふるさとに奉仕する精神や愛着心を育み、地域の催しや伝統芸能への参加など様々な取組を行い、地域全体の絆づくりにつながっている。

絶滅危惧種「ヒロハノカワラサイコ」の栽培・植栽活動

池田小学校では、校区の三瓶山から絶滅した可能性が指摘されていたバラ科の多年草「ヒロハノカワラサイコ」が、2006年、子三瓶山（大田市三瓶町）の山頂で偶然にも2株発見された

第6章 環境保全に向けての参加の促進

のを機に、同植物の保護活動を開始し、今日まで10年以上にわたって育苗・植栽活動を行っている。



「ヒロハノカワラサイコ」は中部地方以北北海道までの範囲に生息しており、絶滅危惧種（環境省Ⅱ類、島根県Ⅰ類）に指定されている。生息域外の大田市三瓶山で見られるのは、標高の高さと、競合する背丈の高い草ぼうが少ない草原の環境によると考えられている。

池田小学校では、発見者である「大田の自然を守る会」のご厚意によりこの株の種をもらい受けて、代々校地内で育苗し、三瓶山西の原に植栽してきた。

現在、三瓶山西の原を中心に生息している「ヒロハノカワラサイコ」のほとんどは、団員と「大田の自然を守る会」の保護活動によって植えられたものであり、三瓶山での絶滅を防ぐ砦となっている。

そして、10年の活動を経た現在では、児童自らその年に咲いた花から種をとってポットやプランターで育て、植栽する自立した取組となっている。植え付けも以前は一株ずつ植えていたが、定植・繁殖の確度を上げるため、現在は数株ずつまとめて植えるように工夫している。



池田小学校では、本活動の成果が、今後「ヒロハノカワラサイコ」の自生につながるよう、「大田の自然を守る会」や、地元の研究機関である三瓶自然館サヒメルと連携して、かつての三瓶山の自然環境の復元に向けた取組を進めている。

② 県立学校の取組

○宍道湖湖面の模様の研究Ⅱ

島根県立松江北等高校 自然科学部

2年 守岡里穂

1. 動機及び目的

ある時宍道湖の湖面に模様があることに気づき、それがどのようなものなのか興味を覚えた。先行研究を調べたが、模様に関する資料を見つけることはできなかった。このため模様の特徴を調べ、模様がどのような現象であるかを調査・研究することを目的として去年から研究を行っている。

2. 去年の研究

2-1. 模様の様子

模様は図1(a)に矢印で示したように暗く見える部分（以後暗部とする）に、明るく見える部分（以後明部とする）が帯状に広がっている。また、図1(b)のように明部は空や対岸の風景を鏡面のように映す。





図1 宍道湖の模様の様子

模様は比較的波が静かな時(さざ波程度)に現れ、波が高くなると消滅または見えなくなる。また、波がまったく無い時は水面全体が鏡のようになる。模様は基本天候に関係なく現れ、そのほとんどは宍道湖に流入する川などから発生している。

2-2. 模様の動き・切断

模様は時間の経過に伴いゆっくりと変形。移動する。その動きは風速や風向に左右されないことから、模様は風の強弱分布ではないことがわかった。また移動することから模様は湖底の形や色と無関係であることがわかった。

模様は船が通ることによって切断される。このことから明部は暗部に浮かんでいるのではないかと考えた。

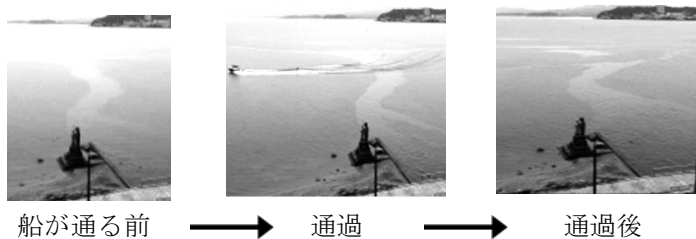


図2 船が水路から発生した模様を横切る様子

3. 今年の研究

3-1. 研究方法

- ①湖面を毎日定時(7:30頃)に観測し、天候や波による模様の現れ方を調査
- ②船で模様の近くまで行き波の様子などを観察
- ③模様の深さごとの水を採取し水質を調査
- ④モデル実験を行う

3-2. 模様境界部の波の様子

模様の暗部と明部は図3のように比較的是っきりとした境界をもつ。また模様の各部分では図4のように明部が暗部よりも波頭がなめらかだった。このことから明部は水面がなめらかになることによって周りの風景を暗部よりもはっきり映し、結果として暗部と明部の見え方の違いになっていることがわかった。

第6章 環境保全に向けての参加の促進



図3 明部と暗部の境界



図4 明部と暗部の波の様子

3-3. 水質の調査

調査1. 袖師地蔵付近の水路からの模様

これまで述べた模様の特徴から、水質に違いがあるのではないかと考え、模様が湖岸に達している際に模様の各部分の水を採取し、水質を調査した。

〈水を採取した場所〉

今回の計測では図5の略図中のA, B, C, D, Eの5箇所の水面の水を採取、計測した。

〈使用した道具〉

- ・ CONDUCTIVITY METER ES-12 (水質計)

〈塩分濃度の区分〉

淡水 < 0.05% < 汽水 < 3.0%, 海水(3.5%前後)

- A…水路出口 B…水路出口から少し離れた明部 C…明部と暗部の境界
 D…明部に近い暗部 E…明部から離れた暗部

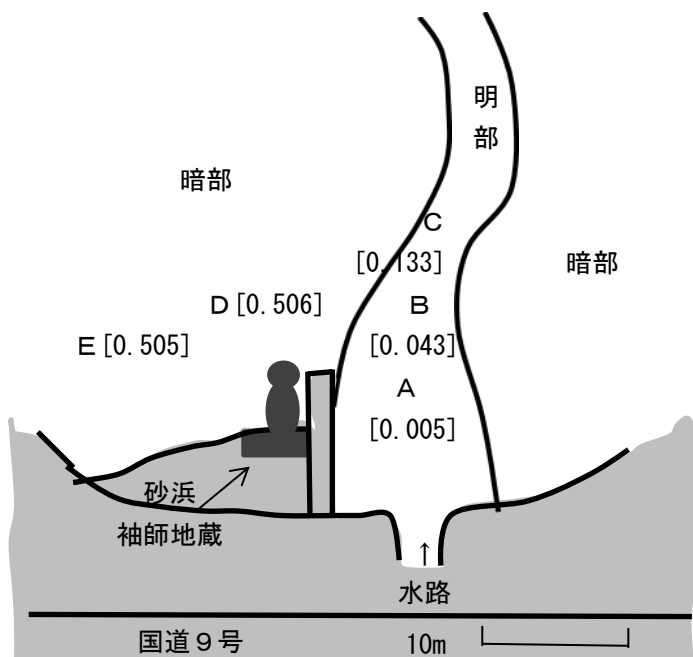


図5 計測地点ごとの塩分濃度[%]

〈結果〉

(電気伝導度の単位…mS/cm)

	電気伝導度	塩分濃度 (%)	水温 (°C)
A	0.07	0.005	18.0
B	0.06	0.043	17.9
C	1.84	0.133	17.9
D	7.03	0.506	18.2
E	7.02	0.505	18.2

図6 水質調査の結果 I

水質計を使用し、電気伝導度と水温を計測した。また、電気伝導度をもとに塩分濃度を求めた。

この結果から、各部分での水温に差はほとんどないことがわかった。一方、塩分濃度は各部分の数値の差が大きく、A, Bが淡水、C, D, Fが汽水であり、明部の塩分濃度の数値は水路出口から距離が遠くなるほど高くなることが分かった。また、暗部のE, Dでは数値の差が僅かであり、ほとんど変わらない。このことから明部は暗部からの流入水であることがわかった。

調査2. 模様の深さごとの水質の調査

模様が船の通過によってちぎれてしまうことからたてた“明部は暗部に浮かんでいるのではないか”という予想を確かめるために明部・暗部それぞれの深さごとの水質を調査した。

〈水を採取した場所〉

この調査では図7中の明部(G)、明部より北に位置する暗部(F)、南に位置する暗部(H)でそれぞれ水深0cm、25cm、50cm、100cm、200cm、300cmの水を採取し、水質を調べた。

採水は井戸用採水器を用い、船の上から行った。

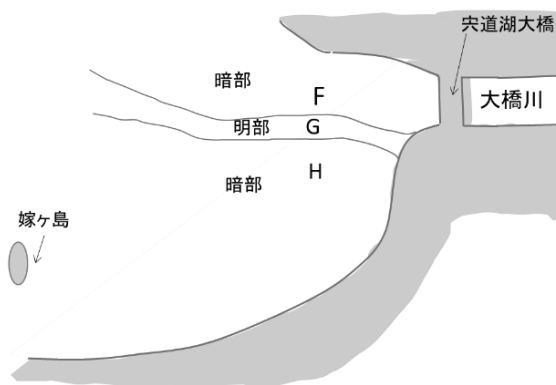


図7 採水場所の略図

〈使用した道具〉

水質計 CONDUCTIVITY METER ES-12

井戸用採水器 IS-400

〈結果〉

塩分濃度 (%) ※水深 3m 以下のため計測不可

水深	暗部(北)	明部	暗部(南)
0 cm	0.86	0.52	0.63
25 cm	0.86	0.55	0.64
50 cm	0.86	0.58	0.65
100 cm	0.86	0.60	0.67
200 cm	0.87	0.63	0.68
300 cm	※	0.73	0.77

図8 水質調査の結果Ⅱ

調査2について、暗部・明部ともに汽水程度の塩分濃度だった。明部では暗部よりも塩分濃度が低く、数か所で同様の計測を行った結果、低塩分層の厚さは25～50cm前後だった。また、水温はすべての地点・深度において18℃前後と同様だった。これらのことから明部は暗部に浮かぶ薄い厚さの低塩分層であることがわかった。

暗部(北)が暗部(南)よりも塩分濃度が高い理由については、暗部(北)が大橋川に近く、大橋川から流入した塩分濃度が高い水の影響を受けているからだと考えられる。

4. モデル実験

ここまでの調査を簡単にまとめると、模様の明部は湖の水と低塩分の水の二層構造になっており、なおかつ波頭がなめらか(風波が発達していない)ことがわかった。私はこのことから、水面が二層構造になることが風波の発達を抑制しているのではないかと考え、モデル実験を行い確かめることにした。

実験1

この実験では二層にした水槽1と、一層にした水槽2を用意した。それぞれの水槽に振動を与え、波の変化を観察した。

〈結果〉

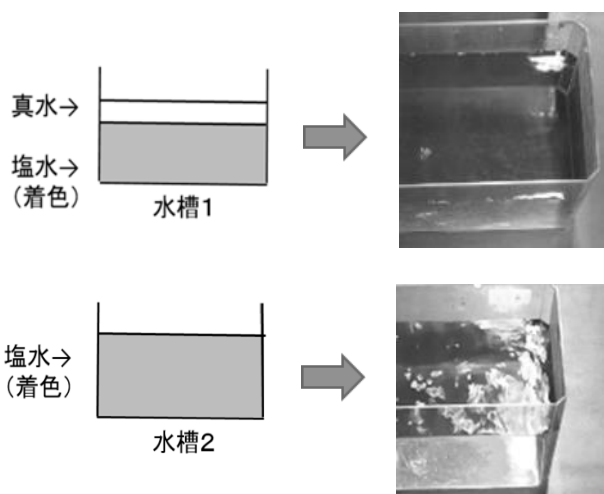


図9 振動を与えた7秒後の様子

上の写真から二層になっている水槽1の方の波が早くおさまっているように見える。ただし、手で振動を与えたため二つの水槽に同時に全く同じ振動を与えることが難しく、この結果は信憑性に欠けると判断した。

実験2

実験1の結果を踏まえ、実験方法を変えることにした。実験2ではアクリル板で縦40cm、横180cm、幅6cmの水槽を作り、二層になっている時と一層の時それぞれ送風機を用いて風を送り、波の振幅を計って比べた。

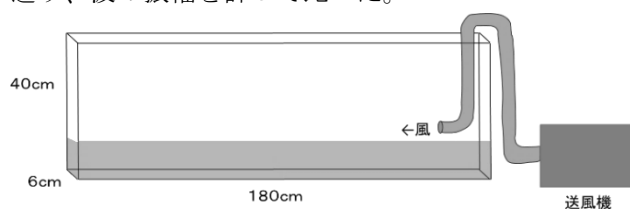


図10 使用した水槽の図

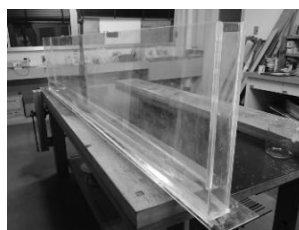


図11 実際に使用した水槽

現在この実験はデータを集めている途中で、まだはっきりとした結果は出ていない。

5. まとめ

今回の研究では、宍道湖に流入した塩分濃度が低い水が湖の水と混ざらず、水面付近に浮くことによって明部になっていることがわかった。また、明部は暗部よりも波が発達しておらず、滑らかな水面に周りの風景を暗部よりもはっきり映し、結果として暗部と明部の見え方の違いになっていることがわかった。

6. 今後の課題

水面が二層構造になることと風波の発達抑制されることとの関係性をモデル実験で調べる。

7. 参考文献

- ・新版地学辞典 出版 地学団体研究会
- ・第22回水理講演会論文集
成層密度流における内部波特性と混合機構について

第6章 環境保全に向けての参加の促進

○藻の発生について in宍道湖

島根県立松江北高等学校 自然科学部
1年 高梨結衣 須藤菜由実

1. 動機及び目的

私たちが住む松江市では、年に一度宍道湖に浮かぶ嫁ヶ島に渡るというイベントが開催される。そのイベントの際に今年は例年よりも藻が多く発生したため事前に主催者側が藻を刈り取らなければならなかったという話を聞き、藻が発生する原因について興味を持った。

2. 調査方法

「藻類とは、植物のうち陸上で繁栄しているコケ植物、シダ植物、裸子植物、被子植物を除いた植物のことを指し、非常に多様性に富んだ生物群である。これらの藻類のうち個体の識別に顕微鏡が必要な藻類が微細藻類と呼ばれ、浮遊性のものは植物プランクトンともいわれる。」
(海洋深層水利用学会HPより)

このように、藻類とは多くの生物群の総称である。今回の研究での「藻」とは肉眼で確認できる藻類を指し、「微細藻」とはその他の顕微鏡でないと見えない大きさの藻類を指す。(3 (1) ⑤ではアオミドロは別記している。)

(ア) 宍道湖の藻の量が多いところと少ないところ、それぞれ3か所、合計6か所の湖水を採取し、調べる。



図1 湖水を採取した地点

○調査した地点

A	市役所付近	藻の発生量が少ない
B	市役所付近	藻の発生量が多い
C	橋の下	藻の発生量が少ない
D	橋の横	藻の発生量が多い
E	美術館付近	藻の発生量が少ない
F	美術館付近	藻の発生量が多い

○調査する項目

- ・水温 ・pH（水素イオン濃度指数）
- ・塩分濃度
- ・不純物や植物、動物プランクトンの量

水面近くまで藻が繁茂していることが確認できた地点を藻の発生量が多い地点、湖岸から見える範囲の湖底にほとんど藻が生えていない地点を藻の発生量が少ない地点とした。また、できるだけ似た条件下で藻の発生量の差を比較するためそれぞれの地点をできるだけ近い場所で探し、調査した。

(イ) 影になりやすい場所となりにくい場所を調べ日照量と藻の発生量の差の関係について調べる。

(ウ) 波や流れによる水の動きと藻の発生量の差の関係について調べる。

3. 結果

(1) 水質

①水温

10月19日17時～18時ごろに計測した。

【予想】

地点Cは橋の下で日光があまり当たらないので他の地点よりも水温が低くなるかもしれない。それ以外の地点では大差は無いのではないだろうか。

【結果】

表1 各地点の水温

地点	水温(°C)
A	21
B	20
C	19
D	20
E	20
F	20

【考察】

すべての地点が約20°Cだった。地点Dが他の地点より少し低くなると予想したが、19°Cで大きな違いは見られなかった。

②pH（水素イオン濃度指数）

【予想】

河川の流入口付近である地点Cや地点Dでは他の地点とpHに差がでるのではないだろうか。

第6章 環境保全に向けての参加の促進

【結果】

表2 各地点のpH測定値

地点	pH測定値
A	7.16
B	7.13
C	7.04
D	7.18
E	7.52
F	7.93

【考察】

どの地点も汽水湖の一般的な値（6～8）の範囲内だった。藻の発生量が多い地点と少ない地点で比較しても大差が無いので、宍道湖での藻の発生量の差とpHは関係が無いと言えるのではないだろうか。

③塩分濃度

3回計測し、平均値を求めた。

【予想】

これもpHと同じく河川の流入口付近である地点Cや地点Dでは他の地点と差がでるのではないだろうか。

【結果】

表3 各地点の塩分濃度(%)

地点	1回目	2回目	3回目	平均
A	0.2	0.2	0.2	0.2
B	0.2	0.2	0.2	0.2
C	0.2	0.2	0.2	0.2
D	0.2	0.2	0.2	0.2
E	0.2	0.2	0.2	0.2
F	0.1	0.1	0.1	0.1

【考察】

地点F以外のすべての地点の値が0.2%だった。地点Fだけ0.1%だったが、地点Fに近い地点Eは0.2%だったので美術館付近の湖水が他の地点と塩分濃度が違うとは考えにくい。よってこれは誤差とみなし、藻の発生量が多い地点と少ない地点で塩分濃度に大きな差は無いと考える。つまり、宍道湖での藻の発生量の差と塩分濃度は関係が無いといえるのではないだろうか。

④透明度

【結果】

表4 各地点の透明度

地点	透明度
A	無色透明。
B	少し白っぽい。透明。
C	無色透明。
D	無色透明。
E	無色透明。
F	無色透明。

【考察】

地点Bだけ少し白っぽく色がついていた。これはペットボトルを投げ入れて採取する際に湖底の砂等が混ざった可能性が考えられる。

⑤顕微鏡による観察

1つの地点につきプレパラートを3枚作成して、10×10の倍率で観察を行った。

【予想】

藻の発生量が多い地点では、藻類に分類される植物プランクトンなどの微細藻が確認できるのではないだろうか。また、肉眼では藻の発生量が少ないように見えていた地点でも微細藻は存在するかもしれない。

【結果】

表5 各地点の顕微鏡による観察結果

地点	観察結果
A 1	特になし
A 2	微細藻 (少量)
A 3	微細藻 (少量)
B 1	微細藻 (少量)
B 2	アオミドロ
B 3	特になし
C 1	微細藻 (多量)
C 2	微細藻 (少量)
C 3	微細藻 (少量)
D 1	特になし
D 2	特になし
D 3	特になし
E 1	微細藻 (少量)
E 2	微細藻 (少量)
E 3	特になし
F 1	アオミドロ
F 2	特になし
F 3	特になし

第6章 環境保全に向けての参加の促進

【考察】

藻の発生量が少ないと判断したすべての地点で微細藻を確認することができた。逆に、藻の発生量が多いと判断した地点Dでは微細藻を確認できなかった。これは河川の流入口であり、比較的水の流れがあることが関係しているのではないだろうか。

また、藻の発生量が多い地点では、藻類の一種である植物プランクトンのアオミドロを確認することができた。

地点Eで確認できた微細藻は他の地点で確認した微細藻とは種類が異なっていた。地点によって異なる種類の微細藻が発生しているのかもしれない。

(2) 日照量

【予想】

藻類は、葉緑体を持ち光合成によってエネルギーを得るので日照量の少ない地点では藻の発生量は少ないのではないか。

【結果と考察】

今回、調査した範囲内の橋の下の地点とその付近の地点を比較した。

調査した結果、橋の下では石には藻が少しついていても湖底からはほとんど生えていなく、他の地点と比較すると藻の発生量が少ないことが分かった。

(1) ⑤では橋の下の地点Cでは微細藻が確認できたが、それは河川の流入口で流れがあったので上流で発生した微細藻が流れてきたのではないだろうか。



写真1 橋の下の様子(図1の②の地点)

↑湖底の白っぽく見える部分は砂。その付近の黒っぽく見える部分は石。湖底からはほとんど藻が生えていない。



写真2 橋の横の様子(図1の②の地点の横)

↑写真1に比べ湖底から生える藻の量が多い。

(3) 水の動き

【予想】

藻は石や湖底に体を固定して生えていることが多いので、流れや波が激しい場所では体を固定しにくく、藻の発生量が少ないのではないかと予想された。

【結果と考察】

宍道湖の湖岸には波による浸食を防ぐために約1メートル四方の石が並べてある。その石と石の間は比較的波の影響を受けにくい。

調査した結果、石と石の間の地点ではそれ以外の地点と比べて、石に付く藻の量は大きな変化は無いが湖底から生える藻の量が多いことが分かった。



写真3 湖岸の様子(図1の③の地点)

4. まとめと考察

これまでに行った調査の結果、以下のことが分かった。

- ・多い地点と少ない地点で水温に大きな差はない。
- ・発生量の差にpHと塩分濃度は関係ない
- ・肉眼で藻の繁茂が確認できなくても微細藻は存在することも多い
- ・日照量が少ない地点では藻の発生量も少ない
- ・波や水の流れの影響を受けにくい地点では藻の発生量が比較的多い

これらをもとに以下のように考察した。

藻は、日照量が多い地点、また波や水の流れの影響を受けにくい地点でより多く発生する。また肉眼で確認できなくても微細藻は多く存在する。

5. 今後の展望

今回の調査では、藻が多く発生する地点の傾向を明らかにすることができた。しかし、今回藻類として調査したものの中には維管束植物も含まれてしまっていたことが分かった。今年大量発生したアオコは微細藻類だが、今回の調査の中で稀に目にしたトクサ類は維管束植物である。今後は、種類についてより正確な調査をすすめたい。また、今回の地点別の調査では水温に大きな差は無かったが、8月頃の藻の量と11月頃の藻の量を比べると8月頃の方が藻の量が多いように感じる。多い地点と少ない地点を比べた時に差は無くても気温によって藻の全体量は違うのかもしれない。今後はこのことについての調査も進めたい。

第6章 環境保全に向けての参加の促進

○参考文献

- ・ 中海・宍道湖の科学—水理・水質・生態系—
石飛裕 神谷宏 山室真澄 2014年2月28日
ハーベスト出版
- ・ 水しらべの基礎知識—環境学習から浄化の実践まで—
山田一裕 平成21年6月5日
オーム社
- ・ 宍道湖・中海水系の藻類
宍道湖・中海の藻類研究会 1996年12月1日
島根大学教育学部生物学研究室編
- ・ 海洋深層水利用学会
<http://www.dowas.net/top.html>

③ しまね出前講座の活用

- 各学校では、県が実施している「しまね出前講座」（県民の要望に応じて県職員が出向いて話や意見交換を行う）を活用した環境学習も行われています。実施回数の多い下水道出前講座「下水道ってな～に？」では、家庭での生活排水対策の意識向上を目的として下水道のしくみや役割を実験などによりわかりやすく解説しており、34団体、1,496名の児童・生徒が受講しました。

【各種受賞校等】

○みんなで調べる宍道湖流入河川調査

- ・島根県知事賞
- ・国土交通省中国地方整備局長賞
- ・農林水産省中国四国農政局長賞
- ・環境省中国四国地方環境事務所長賞
- ・宍道湖水質汚濁防止対策協議会長賞

松江市立来待小学校
 奥出雲町立鳥上小学校
 忌部わくわくサファリ
 出雲市立荘原小学校
 松江市立城北小学校
 雲南市立大東中学校

○みんなで調べる中海流入河川調査

- ・島根県知事賞
- ・島根県教育委員会教育長賞
- ・奨励賞

安来市立能義小学校
 安来市立荒島小学校
 松江市立美保関小学校
 安来市立広瀬小学校
 安来市立島田小学校
 安来市立赤屋小学校

○環境美化教育優良校等表彰

- ・優良校 協会会長賞

出雲市立湖陵小学校

○しまね地球温暖化防止活動大賞

- ・大賞

島根県立松江農林高等学校

○緑の少年団発表大会

- ・最優秀賞
- ・優秀賞
- ・みどりの奨励賞

大田市立池田小学校
 江津市立桜江中学校
 出雲市立朝山小学校
 奥出雲町立阿井小学校
 益田市立都茂小学校
 松江市立本庄中学校
 緑の少年団
 緑の少年団
 緑の少年団
 緑の少年団
 緑の少年団
 緑の少年団
 枕木山自然林愛護少年団

○愛鳥モデル校

- ・出雲市立神西小学校
- ・雲南市立西小学校

第6章 環境保全に向けての参加の促進

2 こどもエコクラブ事業【環境政策課】

こどもエコクラブ事業は、次世代を担う子供たち（幼児（3歳）から高校生までなら誰でも参加可能）を対象とした環境活動のクラブ事業で、子どもたちの環境保全活動や環境学習を支援することにより、子どもたちが人と環境の関わりについて幅広い理解を深め、自然を大切に思う心や、環境問題解決に自ら考え行動する力を育成し、地域の環境保全活動の環を広げることを目的として、（公財）日本環境協会が実施しています。

※平成7年度～平成22年度：環境省事業

平成23年度～：（公財）日本環境協会事業

表6-1-1 こどもエコクラブの登録状況

	登録クラブ	メンバー（人）	サポーター（人）
平成7年度	37	84	—
平成8年度	56	811	—
平成9年度	44	621	—
平成10年度	54	735	106
平成11年度	54	609	145
平成12年度	41	643	147
平成13年度	36	745	151
平成14年度	38	1,165	211
平成15年度	56	1,168	198
平成16年度	46	1,029	250
平成17年度	38	691	202
平成18年度	34	809	208
平成19年度	60	4,406	583
平成20年度	48	1,996	439
平成21年度	78	2,811	577
平成22年度	69	3,084	538
平成23年度	64	2,983	538
平成24年度	35	1,334	338
平成25年度	29	986	270
平成26年度	28	1,433	285
平成27年度	25	1,004	246
平成28年度	13	506	149
平成29年度	15	500	145

第2節 各主体の環境保全活動の推進【環境政策課】

1 普及啓発事業

(1) 環境月間行事

平成6年度から環境月間を6月に改め、6月5日の環境の日を中心として、各種の事業を実施しています。

① ライトダウンキャンペーン

6月21日から7月7日までの間、ライトアップ施設や家庭の照明の消灯を呼びかけました。また、6月21日（夏至）と7月7日（クールアース・デー、七夕）を特別実施日として、両日の夜8時から10時までの2時間、一斉消灯を呼びかけました。

(2) 環境保全普及啓発の広報

今日の多様化した環境問題を解決していくためには、県民、事業者及び各種団体等の自主的かつ積極的な活動が不可欠となっています。

そこで、すべての県民が環境に配慮した行動がとれるように、県の環境施策や各種月間等の環境情報について、ホームページ等の媒体を活用し広報・啓発を図っています。

2 環境白書の発行

本県の環境の状況や環境の保全に関する施策の実施状況等を「環境白書」として取りまとめ、県のホームページに掲載し、県民や事業者への公表に努めました。

3 環境保全活動助成事業

（公財）しまね自然と環境財団を通じて、以下の事業を実施しました。

① 環境保全活動助成金の交付

県内のボランティア団体や法人が行う自主的な環境保全活動を支援するため資金の一部を助成しました。

- ・助成件数：11件
- ・助成額：2,144千円

② 講師・指導員派遣事業

環境アドバイザーとして18名を委嘱し、県民や事業者が実施する研修会等に派遣しました。

- ・派遣件数：50件